第10回夏期福音特別集会（2）（御岳駒鳥荘）
天下を覆すもの
――使徒行伝第13～17章――

１９６３年８月24日
小池辰雄

聖書は驚嘆驚倒して読む　第一次伝道　聖霊と悪霊との対決　十字架と復活と聖霊　キリストに在って義とされる　キリストと同質の義人にされる　信仰とは神の業　霊灯万里　提身とは自分を投げ出すこと　本当の根源現実　使命のある限り死なない　終末的現実　第二次伝道　勝利の器　少なくとも二人は救うこと　霊動的地震　テサロニケ伝道　霊子　霊子こそ天下を覆すもの　アテネ伝道　神の中に生き動きまた在る　コリント伝道　絶対の自由

【使徒13】

1 アンテオケの教会にバルナバ、ニゲルと称うるシメオン、クレネ人ルキオ、
国守ヘロデの乳兄弟マナエン及びサウロなどいう預言者と教師とあり。2 彼
らが主に事え断食したるとき聖霊いい給う『わが召して行わせんとする業の
ためにバルナバとサウロとを選び別て』3 ここに彼ら断食し、祈りて二人の
上に手を按きて往かしむ。
4 この二人、聖霊に遣されてセルキヤに下り、かしこより船にてクプロに
渡り、5 サラミスに著きてユダヤ人の諸会堂にて神の言を宣べ伝え、またヨ
ハネを助人として伴う。……
9 サウロ又の名はパウロ、聖霊に満たされ、彼に目を注めて言う、10『ああ有
らゆる詭計と奸悪とにて満ちたる者、悪魔の子、すべての義の敵よ、なんじ
主の直き道を曲げて止まぬか、11 視よ、いま主の御手なんじの上にあり、な
んじ盲目となりて暫く日を見ざるべし』かくてたちどころに曚と闇と、その
目を掩いたれば、探り回りて導きくるる者を求む。……
16 パウロ起ちて手を揺して言う、『イスラエルの人々および神を畏るる者よ、
聴け。……
37 然ど神の甦えらせ給いし者は朽腐に帰せざりき。38 この故に兄弟たちよ、汝
ら知れ、この人によりて罪の赦しのなんじらに伝えらるることを。39 汝らモ
ーセの律法によりて義とせられ得ざりし凡ての事も、信ずる者は皆この人に
よりて義とせらるる事を。40 然れば汝ら心せよ、恐らくは預言者たちの書に
云いたること来らん。41 曰く「あなどる者よ、なんじら視よ、驚け、亡びよ、
われ汝らの日に一つの事を行わん。これを汝らに具に告ぐる者ありとも信ぜ

ざるほどの事なり」……
45然どユダヤ人はその群衆を見て嫉に満たされ、パウロの語ることに言い逆いて罵れり。46パウロとバルナバとは臆せずして言う『神の言を先づ汝らに語るべかりしを、汝等これを斥けて己を永遠の生命に相応しからぬ者と自ら定むるによりて、視よ、我ら転じて異邦人に向わん。47それ主はかく我らに命じ給えり。曰く「われ汝を立てて異邦人の光とせり。地の極にまで救とならしめん為なり」』……
51二人は彼らに対いて足の塵をはらい、イコニオムに往く。52弟子たちは喜悦と聖霊とにて満たされ居たり。

【使徒14】

……8ルステラに足弱き人ありて坐しいたり、生まれながらの跛者にてかつて歩みたる事なし。9この人パウロの語るを聴きいたるが、パウロ之に目をとめ、救わるべき信仰あるを見て、10大声に『なんじの足にて真直に起て』と言いたれば、かれ躍り上りて歩めり。……
14使徒たち、即ちバルナバとパウロと之を聞きて己が衣をさき群衆のなかに馳せ入り、15呼わりて言う『人々よ、なんぞかかる事をなすか、我らも汝らと同じ情を有てる人なり、汝らに福音を宣べてかかる虚しき者より離れ、天と地と海とその中にある有らゆる物とを造り給いし活ける神に帰らしめんと為るなり。……
19然るに数人のユダヤ人、アンテオケ及びイコニオムより来り、群衆を勧め、而してパウロを石にて撃ち、既に死にたりと思いて町の外に曳き出せり。……

22弟子たちの心を堅うし信仰に止らんことを勧め、また我らが多くの艱難を歴て神の国に入るべきことを教う。……

【使徒16】

……6彼らアジヤにて御言を語ることを聖霊に禁ぜられたれば、フルギヤ及びガラテヤの地を経ゆきて、7ムシヤに近づき、ビテニヤに往かんと試みたれど、イエスの御霊、許し給わず、8遂にムシヤを過ぎてトロアスに下れり。9パウロ夜、幻影を見たるに、一人のマケドニヤ人あり、立ちて己を招き『マケドニヤに渡りて我らを助けよ』と言う。10パウロこの幻影を見たれば、我らは神のマケドニヤ人に福音を宣べ伝えしむる為に我らを召し給うことと思い定めて、直ちにマケドニヤに赴かんと為り。
11さてトロアスより船出して真直にはせてサモトラケにいたり、……
13安息日に町の門を出でて祈場あらんと思わるる河のほとりに往き、其処に

坐して、集れる女たちに語りたれば、14テアテラの町の紫布の商人にして神を敬うルデヤと云う女きき居りしが、主その心をひらき謹みてパウロの語る言をきかしめ給う。……

18幾日も斯くするをパウロ憂いて振反り、その霊に言う『イエス・キリストの名によりて汝に、この女より出でん事を命ず』霊ただちに出でたり。……24獄守この命令をうけて二人を奥の獄に入れ、桎にてその足を締め置きたり。25夜半ごろパウロとシラスと祈りて神を讃美するを囚人ら聞きいたるに、26俄に大なる地震おこりて牢舎の基ふるい動き、その戸たちどころに皆ひらけ、凡ての囚人の縄めとけたり。27獄守、目さめ獄の戸の開けたるを見て、囚人にげ去れりと思い、刀を抜きて自殺せんとしたるに、28パウロ大声に呼わりて言う『みずから害うな、我ら皆ここに在り』29獄守、燈火を求め、駆け入りて戦きつつパウロとシラスとの前に平伏し、30之を連れ出して言う『君等よ、われ救われん為に何をなすべきか』31二人は言う『主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救われん』32斯て神の言を獄守とその家に居る凡ての人々とに語れり。33この夜、即時に獄守かれらを引取りて、その打傷を洗い、遂に己も己に属する者もみな直ちにバプテスマを受け、34かつ二人を自宅に伴いて食事をそなえ、全家とともに神を信じて喜べり。……

【使徒17】

1斯てアムピポリス及びアポロニヤを経てテサロニケに到る。此処にユダヤ人の会堂ありたれば、2パウロは例のごとく彼らの中に入り、三つの安息日にわたり、聖書に基きて論じ、かつ解き明して、3キリストの必ず苦難をうけ、死人の中より甦えるべきことを述べ『わが汝らに伝うる此のイエスはキリストなり』と証せり。4その中のある人々および敬虔なる数多のギリシヤ人、また多くの重立ちたる女も信じてパウロとシラスとに従えり。5ここにユダヤ人ら嫉を起こして市の無頼者をかたらい、群衆を集めて町を騒がし、又ふたりを集民の前に曳き出さんとしてヤソンの家を囲みしが、6見出さざれば、ヤソンと数人の兄弟とを町司たちの前に曳ききたり呼ばわりて言う『天下を顛覆したる彼の者ども此処にまで来れるを、7ヤソン迎え入れたり。この曹輩は皆カイザルの詔勅にそむき他にイエスと云う王ありと言う』8之をききて群衆と町司たちと心を騒がし、9保証を取りてヤソンと他の人々とを釈せり。……

16パウロ、アテネにて彼らを待ちおる間に、町に偶像の満ちたるを見て、その心に憤慨を懐く。17されば会堂にてはユダヤ人および敬虔なる人々と論じ、市場にては日々逢うところの者と論じたり。18斯てエピクロス派、並び

にストア派の哲学者数人これと論じあい、或者らは言う『この囀る者なにを言わんとするか』或者らは言う『かれは異なる神々を伝うる者の如し』是はパウロがイエスと復活とを宣べたる故なり。19遂にパウロをアレオパゴスに連れ往きて言う『なんじが語るこの新しき教の如何なるものなるを、我らの知り得べきか。20なんじ異なる事を我らの耳に入るるが故に、我らその何事たるを知らんと思うなり』21アテネ人も、彼処に住む旅人も、皆ただ新しき事を或は語り、あるいは聞きてのみ日を送りいたり。22パウロ、アレオパゴスの中に立ちて言う、

『アテネ人よ、我すべての事に就きて汝らが神々を敬う心の篤きを見る。23われ汝らが拝むものを見つつ道を過ぐるほどに「知らざる神に」と記したる一つの祭壇を見出したり。然ば我なんじらが知らずして拝む所のものを汝らに示さん。24世界とその中のあらゆる物とを造り給いし神は、天地の主に在せば、手にて造れる宮に住み給わず。25みずから凡ての人に生命と息と万の物とを与え給えば、物に乏しき所あるが如く、人の手にて事うることを要し給わず。26一人よりして諸種の国人を造りいだし、之を地の全面に住ましめ、時期の限りと住居の界とを定め給えり。27これ人をして神を尋ねしめ、あるいは探りて見出す事あらしめん為なり。されど神は我等おのおのを離れ給うこと遠からず、28我らは神の中に生き、動きまた在るなり。汝らの詩人の中の或者どもも「我らは又その裔なり」と云える如し。29かく神の裔なれば、神を銀・金・石など人の工と思考とにて刻める物と等しく思うべきにあらず。30神はかかる無知の時代を見過ごしに為給いしが、今は何処にても凡ての人に悔改むべきことを告げたもう。31さきに立て給いし一人によりて義をもて世界を審かんために日をさだめ、彼を死人の中より甦えらせて保証を万人に与え給えり』……

【使徒18】

……9主は夜まぼろしの中にパウロに言い給う『おそるな、語れ、黙すな、10我なんじと偕にあり、誰をも汝を攻めて害う者なからん。此の町には多くの我が民あり』

●聖書は驚嘆驚倒して読む

「体観、体見」

体で見る。眼で見るのではない。体で見る、ということを、パウロの回心に於て、私たちは、はたと身に受けとったわけであります。

皆さんは、聖書を毎日読んでいましょうね。御飯は食べそこなっても、聖言を食べそこなっ

たら、使徒的信仰ではなくなる。私たちは、

「使徒的信仰」（アポストリッシェ・グラウベ）

を目指しているわけであります。我々が聖書を読むということは、いわゆるクリスチャンの、聖書を読むということと読み方が違う。これをはっきり自分の身につけていっていただきたいと思うわけです。小さな聖書でもポケットに入れて歩いて、いかなる時にも、開こうと思ったら開ける。あるいは聖書の一箇所を破って、ポケットに入れていてもいい。一つの聖書くらい全部破ってしまって、一つずつポケットに入れては読むということでもよろしい。とにかく、並大抵の読み方ではダメである。

メリー・ジョーンズという少女がいました。これは19世紀の始めにイギリスのロイスの地方にいた女の子ですが、非常に貧乏でありまして、聖書を買うお金もない。そこで、暇をつくっては、２マイルほど隔たった人の所を尋ねて行きまして、そこで、２章、あるいは３章と、聖書を読む。２マイルほど隔たった所へ行って、２、３章を読んで帰ってくる。驚くべき少女です。その読み方は、全く飢え渇けるものがあります。飢え渇けるその少女は本当にそこで満たされる。魂の糧を本当に食らって――「読んで」じゃないです、これは、

「わが言を食らう」

です、キリストが言われたように――「わが言を食らい、また、飲んで」帰って来たわけです。

それで、帰ってきては、貧乏ですから、一心に機（はた）を織って、そして段々賃金を蓄えました。それから今度は、25マイル隔たった所まで歩いていった。一日で歩けたかどうかは知りませんが。そしてやっと、一巻の聖書を買い入れた。これが16才の少女。このことを数人の人たちが聞きまして、非常に感動したわけです。それで、逐に協議をしまして、今日のイギリスの聖書会社というものが、こういう人たちのために聖書をおおいに印刷して安く売ってやろうと。イギリスの聖書会社というものが、この少女のこういった真剣な聖書の求めが動機になって、設立されたということをある本で読みました。今余りに、聖書が安売りされ、また安く手に入りますので、おそまつにしていますけれども。ある意味に於ては、聖書はうんと高い方がいいかも知れない。

それほどまで、私たちは聖書を何とも思ってないかも知れないけれども、これは文字が文字でない。どうか、皆さん、何に親しむよりも聖書に親しんでください。

「事実は小説より奇なり」

とか、テレビでやっていますが、聖書が語り伝えているところの偉大なるドラマは、キリストが主人公であるところのドラマは、人間の書いたいかなる小説よりもはるかに奇なる本です。「奇跡」（ワンダー）と言いますけれども、これは本当にワンダーフルな本で、世の中にワンダーフルな本は何かといって、聖書ほどワンダフルなものはない。そういう驚くべき聖書。私は自分の聖書の扉に、

「聖書は驚嘆驚倒して読むべき書なり」と書いた。驚嘆せしめられ、驚倒されながら、読んでいく。そして、自分の中に、その驚嘆驚倒が起こってくる。

「驚き喜ぶ書」

でなければ、その聖書は本当に化体して来ない。時には大いに研究もします。けれども、それは「研究」のための研究では、絶対にない。とくに、若い青年諸君には、そのことを私ははっきり言っておきたい。

近代人は知的な人間が非常に多い。今は知識の世界ですね。しかしながら、知識の世界でも、ゲーテの如く偉大な頭脳の男も、

「私は何も分からなかった、何もすることができないということが分かった」

なんてことを、『ファウスト』の始めの方で告白しているようなわけです。「分かる」よりも、むしろ驚いた方がいい。「驚く」ことが本当に分かることになる。

「本当に分かる」

ということは驚異から始まる。「疑い」の世界から科学は展開するというが、この霊的真理の世界は、疑いからではない。これは「驚嘆、驚異」からして、本当の身に分かるという、「分かり」が出てくる。使徒達はそういうようにして驚かされて、キリストを分かった連中なんです。パウロが正に回心において、全身を以て驚かされちゃった。それは、しかしながら、本当の分かりの世界に入った。

「鱗の如きもの眼より落ちたり」

という「分かり」に入った。それは、頭の分かりとは、分かり方の質が違う。特に、勉強や学問をしてる青年諸君は、どうかそこの突き破りを以て、御霊の智慧、神の奥義を分かる魂になってほしい。聖霊は本当の権威をそこに与える。智慧の世界に於ても、実は、聖霊は創造的な驚くべき霊であります。

「智慧聡明の霊」

と、イザヤ書の中にもあるようなぐあいに。いわゆる知情意の世界ではダメです。もう一つ奥の世界に入って来ないと。

●第一次伝道

今日は、パウロの第一次、第二次伝道のところを、パウロが何年もかかったところを、たった1時間や2時間でもって、ジェット機みたいに飛ぼうというんですから、すさまじいわけです。使徒行伝の13章の1節から14章の28節までが、第一次伝道にかかわるところの記事でありますが。もし、使徒行伝を二つに分けるならば、正に13章から後編に入るわけで、12章までが前編である。主に、ペテロ、ステパノ、ピリポ、この三人のことが――ペテロが中心ですけれども――出ている。13章以下になると、今度はパウロが中心になる。もち

ろん、一々読んで参りません。13章です。

1アンテオケの教会にバルナバ、ニゲルと称うるシメオン、クレネ人ルキオ、国守ヘロデの乳兄弟マナエン及びサウロなどいう預言者と教師とあり。2彼らが主に事え断食したるとき聖霊いい給う『わが召して行わせんとする業のためにバルナバとサウロとを選び別て』

「断食したるとき聖霊言い給う」

と書いてある。御霊が決めてゆく。こういった集会においては、お腹が満ちちゃったらダメですよ。旧約聖書の中にも、

「肉体を太らせて、魂を痩せさせるな」

なんていうような言が、どっかに書いてある。魂が本当に太ると、肉体の方はそういらないと。別に、痩せた太ったなんてことが、どうこうということではありませんけれども。自然と、まぁ断食までいかなくても、食は減じたくなるものであります。ある時は――断食のための断食は決して感心しませんが――やはり御霊に導かれて、食を断ちたくなった時は断てばいいだけのはなし。キリストも、しかし、食べる時には大いに食べたですから。

「食を貪る者、酒を好む者」

なんて悪口を言われたくらいな、自由な人でありました。しかし、決して、キリストは酒に飲まれたのでも何でもない。葡萄酒をお飲みになるときは、一向差し支えなく飲まれたらしい。

3ここに彼ら断食し、祈りて二人の上に手を按きて往かしむ。

即ち、もちろん、この場合の按手なんていうものは、今、教会でやっているような按手とは違うのであります。皆、偽りではない。「形式」、「偽り」は魂の世界では禁物である。昨日、私は、

「いわゆる真実なんてものはダメである」

と言ったけれども、本当の真実は、御霊の世界にこそあるんですよ。自己が立っている、自己中心のところには、真実なんてありはしない。我々が本当に自己から抜けたところに、本当の真実というものが、天的真実というものが、「天真」というものが、そこに動く。

4この二人、聖霊に遣されてセルキヤに下り、かしこより船にてクプロに渡り、5サラミスに著きてユダヤ人の諸会堂にて神の言を宣べ伝え、またヨハネを助人として伴う。

二人、あるいは三人で、御霊に導かれて行けば、非常にそれはお互いに慰めともなり、励ましともなり、また力ともなるわけで、結構なんだ。ある時は一人でもいいですよ。

「本当の強者は独りある時に最も強い」

という、シラーの言葉もありますが、独りであろうと、二人であろうと、とにかく、それは自由な境地が御霊に導かれる境地であります。

●聖霊と悪霊との対決

最初の伝道におきまして、魔術者のエルマという者にでっくわす。

9サウロ又の名はパウロ、聖霊に満たされ、彼に目を注めて言う、10『ああ有らゆる詭計と奸悪とにて満ちたる者、悪魔の子、すべての義の敵よ、なんじ主の直き道を曲げて止まぬか、11視よ、いま主の御手なんじの上にあり、なんじ盲目となりて暫く日を見ざるべし』かくてたちどころに曚と闇と、その目を掩いたれば、探り回りて導きくるる者を求む。

パウロのその言下に、この人は目が眩んじゃった。聖霊に逆らって、何かたばかり事、偽り事をやっていると、それは御霊の光に照らされて、あのアナニヤとサッピラがペテロにやっつけられて本当に倒れて死んでしまったですね。そのように、聖霊の驚くべき生殺の権威があるようなわけであります。

「聖霊に逆らう罪は許されない」

というのが、そのわけです。私たちも、しばしば聖霊に逆らうことが、ヘタすると――「しばしば」と言っては言い過ぎかも知れませんが――あるかも知れない。しかし、そのことに気がついたら、直ちに平伏さなければいかん。パウロの伝道の姿は――こういったところに、パウロにおいて与えられているところの、正に聖霊の権威おいて、御霊の権威、権能ですね――聖霊の権威が宿っている。ですから、聖霊は、ある時には、そのような逆らう者に対しては――こういうのをなめると逆にやられますから――ガッチリとそこは、偽りの世界は排除する。苦しみ、悩み、悲しみ、求めている世界は、みな聖霊が愛をもってそれを救います。けれども、逆らってくる世界、これはまずぶっ倒さなければ。それが本当に悔改めれば、そこで、なお救いの世界に来るでしょうけれども。悔改めのないところには、救いは来ない。聖霊と悪霊との対決です。聖霊と悪霊との対決で、必ず聖霊は勝ち給う。

私たちが、本当に「空念仏」ではなくて、主に全托する。そして、主の聖力と主の義の権威で、本当にこちらが抜けて依り頼めば、それは必ず勝つんです。

「我は既に世に勝てり」

と。また、勝ち進むという勝利の霊ですから。神意を持った、天命を持った、義しき力の霊ですから。悪霊は悪い力を持っている。悪い力を持っているけれども、キリストは義しき力をもって、必ず神の義は立つ。神の偉大な霊の消息は立つ。それに対するところの、絶対的確信をもって行けば――自分自身はどうでもない――必ず勝ちますから。皆さん、何も心配ない。怖いものは何にもない。無力における絶対の力の権威ですね。そういう事態が、パウロの伝道において、パウロはここにひとつの証をせしめられた。パウロの信仰の現実というものは、このような御霊の現実である。

●十字架と復活と聖霊

パウロの第一次伝道の道筋は、アンテオケからセルキヤに下り、そこから船でキプロス島のサラミスに渡り、島の中を向こう側のパポスまで歩き、船でペルガに渡り、ピシデヤのアンテオケ、イコニオム、ルステラ、デルベと進み、それからまた同じ道を戻って、アタリヤから海路を直行してアンテオケに帰って来るという簡単な道のりです。

パンフリヤのペルガに行って、そこで話をしたことが、16節に書いてある。

16 **パウロ起ちて手を揺して言う、『イスラエルの人々および神を畏るる者よ、聴け。**

と、演説をいたします。やはり、ステパノが語ったことをもっと簡単にパウロはここでもって語ったわけだ。

37 **然ど神の甦えらせ給いし者は朽腐に帰せざりき。**

キリストは決して十字架に懸かって、葬られて、おしまいじゃないと。

38 **この故に兄弟たちよ、汝ら知れ、この人によりて罪の赦しのなんじらに伝えらるることを。**

十字架の贖いは、なるほど、我々の「罪の代贖」として――十字架はその代贖ばっかりじゃないが――代贖として、

「神の義が立つために」

と。これはヨハネ書に書いてあるとおり。まず、

「神が義たらんがために」

というんですが。この贖いは十字架によって全うされたが、キリストがもし十字架でおしまいだったならば、罪の権威と力は相変わらずそれを乗り越えて、この十字架の贖いは空しくなる。キリストが十字架の贖いをもって、贖いを本当に贖いたらしめるには、彼は復活しなくてはならない。罪は死を来たらすものですから、十字架の死だけであったならば、いくらそれが代贖の、贖いの死であっても、それだけでは空しくなってしまう。

「罪の価は死なり」

という。しかしながら、罪に打ち勝つものは、生である。罪を背負ったキリストの十字架の死が無かったら、私たちはおしまいですよ。キリストは十字架で、私たちの罪の果であるところの死を受けとったんだ。我々のために代わって、罪の死を――肉体の死ではないですよ――罪に於けるところの存在的な死を、彼は受けとってくださった。

そしたら、実存的な存在的な生というものをここにもたらさなければ、この贖いは全うされないわけでしょ。また死がのさばり、罪がのさばって、どうにもならん。その死に、その罪にとどめを刺してしまう。また、陰府の力に、暗黒の世界に、一番そこに君臨しているサタンという勢力にとどめを刺してしまう。今まだ仮にサタンという奴は動いているけれども、しかしながら、そのサタンの力の上にキリストの力がこれをおおっている。や

がて、このサタンの勢力が完全に覆(くつがえ)されてしまう時が来る。それは、「最後の審判」の時。「新天新地」が来る。

その「生」というのが、即ち、キリストの

「復活の生命」

です。復活の生命の本質は何か。実体は何か。実質は何かということ。でありますので、

「十字架と復活と聖霊」

は、絶対に離すことができない。

パウロの回心に於ては、贖罪の大業を果たした復活のキリストがパウロに現れた。この復活のキリストが、聖霊のキリストとして、今度はパウロを直々に導き、引っ張り回している。この聖霊のキリストは、既に甦えり、罪と死とサタンを完全に征服しているところの勝利の、権威の力あるキリストで、悪霊何ものぞというキリストであります。でありますので、パウロの伝道は、もう既に始めから凱旋の伝道、勝利の伝道です。

だから、本当の「罪の赦し」は、確かな罪の赦しは、十字架をもって、且つまた復活をもって現れてきたキリストであるから、この

「罪の赦しが汝らに」

という。

「はぁ、罪がゆるされているか」

という、頭の、罪の赦しという事態を信じたって、ダメですよ。罪の赦しという事実を、私たちは受けとる。そこには、生命が来ている。罪の赦しを与えられているということは、実はもう死の勢力から解放されている、ということになる。

●キリストに在って義とされる

39 **汝らモーセの律法によりて義とせられ得ざりし凡ての事も、信ずる者は皆この人によりて義とせらるる事を。**

「この人に在って」と。「の中に在りて」「エン」という字が非常にたくさん使われている。

「彼を受けとる者は、信ずる者は、義とされている。モーセの律法に在って、モーセの律法の中では、義とされないところのものは、キリストに在っては、義とされる」

という。

40 **然れば汝ら心せよ、恐らくは預言者たちの書に云いたること来らん。** 41 **曰く**

「あなどる者よ、なんじら視よ、驚け、亡びよ、われ汝らの日に一つの事を行わん。これを汝らに具(つぶさ)に告ぐる者ありとも信ぜざるほどの事なり」

「一つの事」の、「事」とは、本当は「業(わざ)」という意味です。「エルゴン・エルガゴマイ」と書いてありまして、「一つの業(わざ)を業(わざ)する」という。業を行ずるという。我、汝らの内に、

或る「エルゴン」を行ずると。どんなに、つぶさに告げる者があっても、これは、語られた位では、とても信じられないような「エルゴン」であると。これは「神の業」だから、「神業」だからと、書いてある。これは、ハバクク書1章5節の言です。その「一つのエルゴン」というのは何かというと、キリストが私たちを本当に罪から解放した。罪から解放して生に移したことが、本当の「エルゴン」です。これはエルゴン中のエルゴンです。

だから、「義とせられる」と。なるほど原語でも「義とせられる」なんですが、私はもっと大胆にこれを掴みたいと思う。

「信仰によって義とせられる」

と、プロテスタントでも散々聞かされている。

「我々は業（わざ）では義とならない、業では神さまの前に義とならないが、信仰によって義と認められる」

なんて。それで皆、気安めになっているような、信仰ですよね。そんな気安めでもって、一体キリストの喜びの音信なんてものが有るかというんだ。それはまやかしで、ごまかしですよ。偽善ですよ、そんなのは。随分、私はひどいことを言うけれどもね。だから、クリスチャンは本当の力を持たない、生命を持たない、喜びを持たない。論より証拠だ。

こういう、言葉が躓きとなっちゃったんだね。「信ずる」者とは、「受けとる」者なんです。一体、何を信ずるんですか。キリストのいろんな、偉い言葉だの、キリストの偉い業だのというでき事や何かを、そういった事柄をいくら信じても、ダメですよ。「言（ことば）」というのは、事柄じゃないんだから、キリストという「言」は。神の「表現」そのものなんだから。「キリスト」という「言」、驚くべき生命（いのち）の言（ことば）。「生命の言」というと、何かすぐ私たちは、耳で響いてくるような言葉だと思っている。キリストという驚くべき「表現体」を「受けとる」ことが、「信ずる」ということなんです。モーセの律法を本当に受けとって、本当に律法を行ずれば、これは「生きる」んです。「律法は聖なるものだ」と、パウロが言っているように。

「律法は聖なるものだから、これを本当に行ずれば、生きる」

と、申命記にも書いてある。パウロもそう言っている。ところが、律法を本当に行じて生きた人は、キリストの他にいないんだ。そこに秘密がある。一体、どのようにして、キリストは律法を行じたのだろうか。見てみると、キリストという人は律法を言葉の上では破っている。イエスという人は律法を破ってしまう。それは破っていないんだ、本当は、奥をつかまえている。形は破ったが、本体は、彼は捕まえている。それは、私たちは残念ながらできない。パウロはいくら一生懸命にやっても、彼は素晴らしかったけれども、彼は律法を満たしてはいなかった。律法を「満たす」ということができなかった。本当に満たしたのはキリストだけであります。一体、この「言」は何ですか、「モーセの律法」とかいうのは。これは、神霊から発しているところの言でしょ。神霊がこもっている言です。神霊が籠もっている言だから、モーセの律法の一つをつかまえてみても、その言は霊言であ

るから、その霊が、元であるところの霊が本当につかまえられていなければ、言が本当に受けとられないわけです。だから、本当に神の霊に直結したところの、キリストだけが、この律法を満たした。「殺すなかれ」というが、

「汝は殺人はしない」

ということ。「人を憎まない」は、いや実に、

「敵をも愛する」

というところまで、突き抜けてしまう。

●キリストと同質の義人にされる

「信ずる」というようなことは、キリストを本当に受けとって、今度は、「義とされる」という。「義とされる」は、

「義人とされる」

と、私は「人」という言葉をその中に入れた。神霊から発した聖言を行じたキリストは「義人」であった。しからば、そのようなキリストを受ける者は、キリストと同質の義人にされる。本質的に義人とされる。

マルチン・ルターが、

「クリスチャンは義人であり、かつまた罪びとである」

という、絶対矛盾の自己同一だといった。だけれども、単に「絶対矛盾の自己同一」というような言い方ではまだ言い切れないところの、深い消息なんでありますけれども。義人とされているんですよ。

「彼を信ずる者は義とされる」

というのは、「義人とされている」ということ。神さまがそれをただレッテルのように「義と認めた」と、何か体裁みたいなね、そんなようなことではなくて、「義人とされている」。キリストの聖霊が、霊言の生命が本当に私たちの中に来るんですから、そうしたらば、神の御意、キリストの御意と一つのものを、受けとっているのだから、そこのところは、

「今この人に在って義人とされている、キリストという人の中で義人とされている」

というように読まなくてはならない。でなければ、このようなパウロの実存は、使徒たちの実存は生じて来ない。私たちの実存は生じて来ない。いわゆる

「信仰によって義とされる」

というような事柄を、受けとるのではなくて、その業そのものに於て、その業の内容を受けとってしまう。

●信仰とは神の業

だから、「一つの事」ではだめ、「一つの神業」だな――「神」という字はないけれども――

――この「業」を行う。キリストは神的な業を行う。

「信仰とは神の業である」

と、マルチン・ルターが言った。私が時々皆さんにご紹介する、有名な『ロマ書の序文』の中のルターの言葉です。

「本当の信仰は、神の業である。我々の中に於けるところの、神の業であって、それが私たちを変えて、そして、新しく神から生まれさせて、古いアダムを殺してしまって、心と心情と思いとあらゆる力に於て全然別な人間にしてしまう。しかも、生命をそこにもたらすものである。これを信仰という。

と、マルチン・ルターのこの言葉は、私は至言だと思う。ルターの発した言葉の一番素晴らしい言葉の中の一つである。

おお、信仰というものは、何と、生き生きとした、作用するところの、行為的な、また力あることがらではないか。だから、これは、間断なく、良き事をしないではいられないものである。

と書いてある。だから、ルターは、信行一如の世界を掴んでいる。そして、

一体、良き業が為されるかどうかと、きわまりないのに、既に良き業が為されている。」

と書いてある。もちろん、そういう意味における、信行一如が、ルターの言うとおりな事態になってくるが、それでも、なお人間はズレている。死にいたるまで、相変わらずダメなんだ。仕方がない。けれども、信そのものが神わざである。信そのものが業である。

「永遠の生命を受けるためには、いかなる業をなしたらよいか」

と聞いたら、

「[30]**神の業はその遣わし給える者を信ずる是(これ)なり**」（**ヨハネ6・30**）

と、キリストが言われた。

「神の業は信ずる是なり」

と。信ずるということは神業、パウロがここで言っている「エルゴン」である。そのような業は元々どこから来たか。キリストの贖罪の業から来ている。キリストの贖罪の大業からして、この信という業の根拠が来ていますから、もはや、「義とされる」ということが、実質的に、私たちの本質が義人とされている。既に、本当の救いというものが、義人とされているその中核が生じているんだ。どんなに、まだマイナスが、暗黒の面があっても、ここに、絶対的な光を放っているところの焦点が結ばれているわけです。それが我々の信仰の事態です。これは、聖霊を受けとっていなければ、そういうことは言えません。「自分の信仰」なんて言っている限りは。

●霊灯万里

このパウロのところの、

41 **曰く「あなどる者よ、なんじら視よ、驚け、亡びよ、われ汝らの日に一つの事を行わん。**

「業」に驚けというのは、驚いて、

「あぁこんな事かと驚いて、怪しんで疑う者は亡びろ。驚いて本当にその前に平伏す者は、本当に生きよ」

というわけです。ところが、やはりユダヤ人は、相変わらず、伝統的なユダヤ教に固執するパリサイの者らがいる。パウロが元そうだった。だから、パウロはよく分かるんです。相手がいかにパリサイであって、自分もかつてはそうだったけれども、キリストは、そのしょうがない自分を捕まえてひっくり返しちゃったと。

45 **然どユダヤ人はその群衆を見て嫉に満たされ、パウロの語ることに言い逆いて罵れり。**

それで、「言い逆らって罵った」とあるでしょ。ところが、

46 **パウロとバルナバとは臆せずして言う『神の言を先づ汝らに語るべかりしを、汝等これを斥けて己を永遠の生命に相応しからぬ者と自ら定むるによりて、視よ、我ら転じて異邦人に向わん。**

そして、聖霊の言うところにより、

47 **それ主はかく我らに命じ給えり。曰く「われ汝を立てて異邦人の光とせり。地の極にまで救とならしめん為なり」』**

と。パウロは正に異邦人の光、動く灯台とされたわけです。霊灯万里だ。彼は霊灯とされた。万里の極までも行こうという。『霊灯万里』という詩（小池辰雄著作集第8巻『詩歌集』1986年刊に収録。1953年9月1日作詩）を、私は或る時、霊感に満ちて一晩で書いた。『曠野の愛』の始めの方にね。

51 **二人は彼らに対いて足の塵をはらい、イコニオムに往く。52 弟子たちは喜悦と聖霊とにて満たされ居たり。**

彼らは受けとらないからね、足の塵を払って――キリストがそう仰った――イコニオムに往く。弟子たちは喜悦と聖霊とにて満たされていた。どんなに迫害され罵られようが、自分たちの中に溢れているところのこの世界は分からん。ああ気の毒だ、彼らはと。それは聖霊が来なければ分からない。いわゆる信仰では、分からん。喜びと聖霊に満たされて突き進んでいった。

●提身とは自分を投げ出すこと

14章です。

8 **ルステラに足弱き人ありて坐しいたり、生まれながらの跛者にてかつて歩みたる事なし。9 この人パウロの語るを聴きいたるが、パウロ之に目をとめ、**

救わるべき信仰あるを見て、

聖霊の力が作用する、その受けとりの姿である、その魂は。これをパウロが見て、聖霊に逆らわないその人を見て大声で、

10**大声に『なんじの足にて真直（まっすぐ）に起（た）て』と言いたれば、かれ躍り上りて歩めり。**

キリストも、時々大声を出した。

私たちは常識や、いろいろな判断で、信仰の一角に何か曇りがある。曇りがあるとダメですね。

「それでは、曇りがないように、精神を統一するのは大変だな」

と、またそういうことを言う。あるがままを、そこに投げ出した時に、知らない間に、曇りはとれてしまうんです。曇りを気にして、曇りを取ろうとしたって、曇りはとれない。曇ったまんま、それをそこに投げ出してごらん。全体が、バァーッと光に透過されてしまう。それが、本当の提身という。提身とは、おのがダメさ加減を、自分の曇りさ加減を、そのままさらけ出して、そこに自分を投げ出すことが提身です。

「曇りを先ず自分で取ってから、それから、出掛けましょう、そうして、み力を得ましょう」

なんて。「曇りを取ってから」と、いつ取れますか、そんな曇りは。曇りはあっていいですよ。そういう提身。雲、霞みの中に見えているところのあの山の姿。しかしながら、あの雲霞みの中に見えているところの山の姿の、その本質が見えなくてはね。そういう、提身というのは、何か純真になったとか、いわゆる人間的純真とか、何とかと言っているわけじゃない。提身とは、あるがままの姿をそこに投げ出した姿を提身という。降参ですよ、

「無条件降参」

です。無条件降参をいよいよ本ものにするためには、無条件的に降参されている自分の姿を十字架に見たらいい。十字架の上に無条件降参の姿が見えたら、無条件降参ができるんです。必ず誰でも、いついかなる時も、無条件降参ができる。この実証は、イエス・キリスト自らが為してくださっているから。

「我は罪びとの首（かしら）」

と言って、十字架に懸かったからです、キリストが。パウロが言ったんじゃないんだ。聖霊のキリストが言ったんだ。

キリストが、そのようにして、私たちに無条件降参を与えた、そこに倒れる。皆さんは、もう絶対に、この第10回御岳（みたけ）夏期特別集会を通して、ガラリと別人となって下って行く。

「そうでしょうか」

じゃないですよ、「そうです」と、必ず。「そうでしょうか」と言う人は、自分の中に何か条件を考えている人です。無条件なんだから。

「無条件だ」

と言ったら、

「ハイッ」

と受けとるより他に何もない。キリストの絶対恩寵を、「ハイッ」と受けとるより他にない。観念じゃないんだから、事実なんだ。キリストは決して観念でもって教えているんじゃないんだから。

●本当の根源現実

そうしたら、大声でもって言いまして、

かれ躍り上りて歩めり。

私は、パウロほどの大声は、あの時は、叫ばなかったけれども、鹿島の伝道でもって、正直、びっこをひいて来た人が、皆の前で躍り上がって、立ってしまって歩いちゃったですね。驚いたです。

そのような具合で、その人が本当に受けとれば――ここにも少し足の悪い方があるが、それが、例え、立てなくとも――立てるか、立てないかという、現象にとらわれてはダメですよ。目が見えなくても、見えるか見えないかという現象にとらわれては、いかんです。本当の根源現実をハタと受けとって、後は、全托して、そして、絶対にその願いを棄てないで、進んで行くことです。

「私は何年もお願いしても、ちっとも、なかなか目が見えません、もうこの辺でよしましょう」

なんては、いかんですよ。どこまでも、願っていきなさい。しかしながら、願えば願うほど、内側には、心眼はいよいよ開かれていく。心眼がいよいよ開かれているところに、屈託のない本当の楽な願いが進んでいく。

その時に直ちに目が見えて、それで、キリストにそれだけ助けられながら、実はキリストの本当の信仰に入らなかった現象がたくさんあるんだから、この福音書の中には。キリストは、伝道は非常に現象的には成功しているけれども、実は徹底的失敗なんだ。それは知っているんだ、キリストはちゃんと。だから、どうしても、十字架に自分が懸かるまでは、聖霊が来るまでは、救が救にならないことを知っている。それほどまでに、新約聖書に於て証しているところのイエス・キリストの霊というものが、真剣に本当に受けとれるまでは、キリスト教界はいくらやってもダメ。そのかわり、このようになったら、新興宗教がどんなにはびこりましても、絶対に負けません。姿においては負けているような少数であっても、神さまの目では勝っているんです、その人たちが。創価学会なんてのが随分のさばっているが、大丈夫、そんなのは。びくともしない。

私たちはいわゆる相対的な現象の世界の、もう一つ奥の素晴らしい現実の世界を受けとっていく。その意味においては、本体即本当の現象の世界なんです。どうか、そういうことでもっ

て、もぅ疑いと懼れは禁物であります。主イエス・キリストの生命の世界は、何と、そういった素晴らしいことであるかと。

そのようにして、聖霊のキリストの助けによって、もぅこれは一つの例に過ぎないんだけれども、片っ端から、パウロは使徒行伝に言われてないようなことを、たくさんいくらでもやったんだ。新約聖書なんてのはそのごく一部分ですよ、キリストのことについても。

●使命のある限り死なない

ところが、これだけのことで、驚いたんだね、皆がね。そして、バルナバとパウロとを何かギリシヤの神々みたいに思ってしまって、神さまのように取り扱おうとした。とんでもないはなしだ。

14 **使徒たち、即ちバルナバとパウロと之を聞きて己が衣をさき群衆のなかに馳(は)せ入り、15 呼ばわりて言う『人々よ、なんぞかかる事をなすか、我らも汝らと同じ情を有(も)てる人なり、汝らに福音を宣(の)べてかかる虚(むな)しき者より離れ、天と地と海とその中にある有らゆる物とを造り給いし活ける神に帰らしめんと為(す)るなり。**

我らもお前さんたちと同じように、食べたい、眠たい、泣きたい、笑いたい、という人間だよと。創造の神は私たち一人一人を本当に――それは親は生んだろうけれども――本当の意味に於ては、神さまが我々を創造したんだ。真の創造主を――創造の神さまは偶像にならん、一切の偶像神とは桁が違う――この事を知らせようというのに、この神さまの創造の力が働いて、愛の創造の力が働いて、こうやっているのにとんでもない。私たちを神的なものにしようなんて思って、何か供え物なんかして、何をやっているかと。まぁそういったようなのが多いわけだ。それでもって、

「ああよしよし」

となったら、これはパウロもバルナバもいわゆる「教祖」になってしまう。いわゆる教祖になんかなったら、大変です。ところが、数人のユダヤ人が、やっぱり、妬みを生じて、

19 **然るに数人のユダヤ人、アンテオケ及びイコニオムより来り、群衆を勧(すす)め、而してパウロを石にて撃ち、既に死にたりと思いて町の外に曳(ひ)き出せり。**

瀕死の状態にしてパウロを町の外に引き出したという。だから、パウロが、コリント後書11章に、いろんな患難にあったことを、表のようにしてあげているでしょ。そんなに、死にそうになっても、パウロに神さまの、キリストの使命がかかっている限り、使命的存在である限り、彼は死なない。使命のある限り、彼は死なない。護られている。

リビングストン（デイヴィッド・リビングストン 1813～1873 イギリスの宣教師、探検家）が、アフリカの伝道をして、いろんな野蛮人だの、猛獣だの、疫病的なものだのと、いろんなものに出くわしているでしょ。しかし、彼は最後にいたるまで、護られていた。湖畔で、

祈りつつ、ただ独り死んでいった。シュヴァイツァーさんも、キリストの愛に、本当に福音を実証している人ですけれども、またその先輩に、このリビングストンを忘れてはいかん。もっと困難な状態であった。リビングストンは出掛ける時に、詩篇121篇をお父さんと一緒に読んで、出掛けて行った。

「すべての道を、神はまどろむことなく、汝を護り給う」

という。リビングストンは、正にそういった、聖霊の信仰の戦士であったのであります。

●終末的現実

パウロも、そのようにして、

22 弟子たちの心を堅うし信仰に止らんことを勧め、また我らが多くの艱難（かんなん）を歴（へ）て神の国に入るべきことを教う。

もう、パウロの伝道している現実は、キリストが既にそうですが、正にこれは終末的現実でありますから。

「神の国の到来は間近にある」

という現実において彼らは動いていた。彼らになぜ力があったかというと、この終末的信仰であったからなんです。

「神の国は、本当に今にも来る」

と。今にも来なかった。来なかったけれども、今にも来るという――これはただ時間的じゃないですよ、質的に――本当に間近にということを、本当に身近に質的に感じている。神の国は既にパウロの中にあった。そして、必ず神の国は来るという、地上の実質は既に来ているんだ。

「どうなってもいいよ、既にやって来ているよ、実は私の中にあるんだ。これが保証だよ」

と。

「二千年来なかったからこれから一体何万年後だろうか」

なんて、そんな想像したら、信仰はズレてしまう。二千年たってもまだ来ないから、二千年の経過という、これだけの時間の重力がむしろここにかかっている。いよいよ質的には、パウロたちが待ち望んでいたよりも、もっと凄い質をもって我々はこれを待ち望むべきはずである。

フルシチョフとケネディが、とにかく平和への一歩を進めていることは結構です。結構ですけれども、それで、たとえ戦争が幾年かなかろうとも、それで、神さまの呼んでいる、神的平和の国は来ない。相変わらずゴタゴタであります。偽りの平和です。おおわれたる平和である。本当に喜びの世界は、福音を受けとらなければやって来ない。

私は、本来の日本人の中には非常にいいものがあると思うんだけれども、現実の日本人

はまことに嘆かわしいですね。特に、大都会にいますと、そのことは痛感します。けれども、決して望みを棄てない。どんなに絶望的な現実でも、絶対に望みを棄てない。いや、こちらが断念的なところをなお突破してこそ本当に、

「アブラハムは望むべきにあらぬ時になお望みたり」

という。この世に絶望するところに、神の世の、本当の希望がまた力強く入って来る。だから、始末が悪いです、このクリスチャンというのは。決して行きつまらないんだから。決して行き詰まらない人になってしまう。

●第二次伝道

15章の36節あたりから、第二次伝道の方に入ってくるわけです。第二次伝道はまた、第一次伝道した所を、少しコースは違いますけれども、辿ろうとしたんだ、始めはね。信仰を固めようと思って。本来のユダヤ人が律法の義のことを散々言って、

「あのパウロの言うことは間違いだ」

なんて、ひっくり返して、「異なる福音」を宣伝始めているから。パウロは、あのガラテヤ書でもって、そのことを非常に怒って書いているわけです。

「ガラテヤの諸教会に送る」

と。パウロが始め方々行ったところは、ガラテヤですからね。

今度は、シラスが選ばれて、

「兄弟たちより主の恩恵に委ねられて出で立ち」

と、40節に書いてある。今度はバルナバじゃないんだ、シラスだ。そして、デルベ、ルステラと、逆コースを行ったわけです。

ところがですよ、元の所をまた行こうと思ったが――16章です――今度は、

6 **彼らアジヤにて御言を語ることを聖霊に禁ぜられたれば、フルギヤ及びガラテヤの地を経ゆきて、7 ムシヤに近づき、ビテニヤに往かんと試みたれど、イエスの御霊、許し給わず、8 遂にムシヤを過ぎてトロアスに下れり。**

アンテオケから先は、今度は別の方に行ってしまって、西の方へずうっとのびて、エペソまで行ってしまうわけです。

9 **パウロ夜、幻影（まぼろし）を見たるに、一人のマケドニヤ人あり、立ちて己を招き『マケドニヤに渡りて我らを助けよ』と言う。**

不思議なことがあるね。マケドニヤなんて、まだ行ったことがないんだ。そこにマケドニヤ人が現れて来て、「私たちを助けなさい」と。これは、ちょうどアナニヤという者を通して救が来たあの回心の時と同じような具合に、ちゃんと未知の人が見せしめられるわけですね。

10 **パウロこの幻影を見たれば、我らは神のマケドニヤ人に福音を宣伝えしむ**

る為に我らを召し給うことと思い定めて、直ちにマケドニヤに赴かんと為り。

11 **さてトロアスより船出して真直にはせてサモトラケにいたり、**

サモトラケという、エーゲ海の北の方に島がある。サモトラケのニケーという、有名な彫刻がある。「ニケー」というのは、ギリシヤ語で「勝利」という字です。「勝利の女神」の有名な彫刻がある。翼を大きく張ってね、残念なから、頭はどっかへ飛んじゃって分からない。「勝利の女神」の像が発見された、あの有名なサモトラケです。

実は、このサモトラケのニケーの像の写真を、私は今度、字引のキリストのサマリヤの女との会話の裏の頁にのっけるんだよね。何故、私はそんなことをするかというと、「宗教と文化」ということ。井戸端のキリストは、「宗教」です。決して、神殿なんかで、私は表したくない。あの、素朴な裸足のキリストがいい。素朴な裸足のキリストが永遠の生命を与える。後ろ側には、この勝利のニケー。これは「文化」の方です。ギリシヤ文化の象徴として、ニケーというのを、私はここにつかまえたわけです。だけれども、私はそこに註をつけた。即ち、

「本当の勝利は愛の勝利である。剣の勝利じゃない」

と。随分、ひどい註をつけるもんですね

●勝利の器

この、サモトラケにいたり、次の日ネアポリスにつき、今度は、とうとうマケドニヤの方へ渡って参りました。

13 **安息日に町の門を出でて祈場（いのりば）あらんと思わるる河のほとりに往き、其処に坐して、集れる女たちに語りたれば、14 テアテラの町の紫布の商人（あきうど）にして神を敬うルデヤと云う女ききり居りしが、主その心をひらき謹みてパウロの語る言をきかしめ給う。**

ギリシヤの世界で一番先に、パウロの福音を受けとった者は、ルデヤという女の人でありました。

大体、女性は単純に信仰の世界に男性よりも入りやすい。素直だからでしょうね。男はどうも曲がっている。すぐ抵抗する。皆さんは、ここにも女の方が多いけれども、本当に第二の国民の、霊の母として――それは結婚しようが独身であろうが、そんなことは問題じゃない――国民の霊の母として、皆さんは是非、その存在を自覚していただきたいと思うわけです。むしろ、そういったご婦人によって導かれた幼子の魂は、やがて本当の活躍を始める。言葉の正しい意味において、偉い人のお母さんというものは皆、何か本当に質的に偉い人である。

外側に表れる必要はないですよ。大事なのはみんな質ですから。どれだけの教育を受けたとか、どういう学校を出たとか、そういうことじゃない。神さまの、神の質をもった、神質を持ったところの、その霊質を持ったところの女性に、皆さんはなっていただきたい。

そして、決してその存在が空しくない。地上にあった時は、何も働きがなかったように見えることがたとえあろうとも、決してそれは空しくない。

「わが存在は決して徒(いたず)らならず」

ということをはっきりと自覚していい。何をしたか、しないか、そんなことじゃない。存在そのものが大事。ところが、置物のように存在してはダメですよ。存在そのものが即ち伝道でなければ。存在そのものが、伝道の使命を自覚して、祈ってなくては。すること為すこと一切が、即ち祈りということでなければ。祈りとは、そのような伝道ですね。祈りの力は強いですから。

「この野郎」なんて思ったそのパウロが実は、ステパノの祈りによって支えられていた。そういった、愛の祈りは必ず勝利する。だから、この「ニケー」という「勝利」は、そういう意味に於て、私は福音的につかまえてしまう。本当の勝利。皆さんは、勝利の器なんだよな。

「戦闘の教会」

というけれども、なるほどこれは戦闘ですよ。これは本当に凱旋、勝利を既に内に持っているところの戦闘であって、勝ったか勝たないかどうだろうかなんていう、そんな戦いじゃない。必ず勝っている。勝ち進んで行くところの戦い。滑っても転んでも負けていても、なお勝っている。たとえ負けても勝っている。進んで行く。

●少なくとも二人は救うこと

いいですか。それだけの、皆さん、迫力を持っていますか。そうしたら、あなた方を通して一生のうちに、もし二人の人が本当に、どんなことがあっても決して揺るがない信仰の世界に、この御霊の信仰の世界に入っていかなければ。そして、その人がまた、二人を捕まえてごらん。それが、知らない間に、ジリジリと日本には本当に福音が展開していく。これが本当の伝道であります。少なくとも、二人はひっくり返る。私は、今日は、「天下を覆すもの」という題を、なぜつけたかというと、そのことなんです。あなた方は質的に本当に、

「天下を覆す者」

である。一人がただ一人じゃ困るよ。いつまでたっても、これだけの人数じゃ。二人だ。二人は本当の、どんなことがあっても決して消えていかないところの、御霊の――御霊じゃなければ、みんな消えてしまうから――御霊の信仰を持ってる。その御霊の信仰を持てば、必ずまた二人を、神さまに祈って二人を捕まえて、そいつを本ものにしていく。それをやってごらんなさいよ。私は、何も組織を作らなくても、皆さんがそれをやっていけば、知らない間に日本中、

「これ文殊(もんじゅ)となれり」

ということと同じですね。日本中これ御霊のキリスト者となれり、ということになっていく。

先へ行けば行くほど、その増大の仕方は強くなるだろう、恐らく。本ものは少数から始まる。

ここに今、60、70人の戦士がいる。この70の戦士が、140となり、280となり、その先は計算できない（笑）。私は、数学の頭は悪いから。そういうわけでありまして、神の国は必ずそうなる。今まで、キリスト教の歴史はそれをしてない。だから、数では、なるほど大勢にはなったさ。けれども、その数はいい加減な数だよ。本当の数は増えていかなければ、神の国は。キリストは、たった12人。12人のうちの1人がキリストを裏切った。しかしながら、12人のうち、本当に使徒として立ったのは、3～4人だ。それだから、このパウロという奴が、「地の極までも」という、このすさまじい突進を始めた。なんといっても驚くべき器です。それでも、私はパウロに驚かない。パウロを素晴らしいと言わない。パウロに働いた御霊が、この頑くなな奴をひっくり返した聖霊が、復活のキリストが素晴らしい。主は地の極までも世の末までも、今もなお、突き進みつつあり給う。この福音は絶対に負けっこない。いいですか。何とこれは、皆さんは、何とも言葉で表現できないキリストの期待を、キリストの実力に裏付けられながら、期待をされているところの存在であります。これは、どんな事があっても絶対に棄てないというような、聖霊の信仰の人をつくりあげるのは容易なことではない。ヘタすると、二人もできないかもしれない。しかし、どうか、少なくとも二人は救ってください。

「救ってください」

と言ったって、あなた方がこねあげて造るんじゃないけれども。

●霊動的地震

また、占いの霊につかれている者にでっくわしまして、それをパウロが、

18 幾日も斯くするをパウロ憂いて振反り、その霊に言う『イエス・キリストの名によりて汝に、この女より出でん事を命ず』霊ただちに出でたり。

キリストの名が、彼の中に化体しているから、「名によりて」という時は、実言であるから、だから、パウロが権威をもって、

「キリストの名によりて」

と言ったら、もう、その女の中にいるところの悪霊は出て行ってしまう。

「霊ただちに出で行けり」

と、福音書のキリストと同じです。

毎日毎日の存在的な祈りが大事ですよ、皆さんね。祈りとは、キリストに常に全托していくことである。キリストに捕らえられていくことである。キリストの懐の中に安らい、かつ、キリストの懐の中にあることである。自由自在にそこから発してゆく。

ところが、儲けが少なくなってしまったもんだから、怒って、パウロとシラスをとうとう捕まえてしまった。そして、牢屋に入れられてしまった。えらいことになった。しかも、

多く笞でぶっ叩いて、獄に入れて、獄守に固く守るべきことを命じて、
24 **獄守(ひとやもり)この命令をうけて二人を奥の獄に入れ、桎(かせ)にてその足を締め置きたり。**
25 **夜半(よなか)ごろパウロとシラスと祈りて神を讃美するを囚人(めしうど)ら聞きいたるに、**
本当にキリストと一つ、
「我とキリストとは一つなり。我がキリストか、キリストが我か」
というようなわけだ。
「南無と称えば阿弥陀来にけり一つ身を我とはいわん仏とはいわん」
「主よと言えば主来たりけり、我とはいわんキリストとは言わん」
というわけだ。そのような、「主よ」と全身を以て叫べば、直ちに主はわが内に聖霊を以てあり給うという、ごまかしのきかない世界です。いくら聖書を研究したって、10年やったって20年やったって出てこないです、こんな世界は。どうか、皆さん、本当にそういうことになってください。私なんかまだまだダメのカスですから、人間小池なんて見てないで。
26 **俄(にわか)に大いなる地震おこりて牢舎(ろうや)の基(もとい)ふるい動き、その戸たちどころに皆ひらけ、凡ての囚人の縄めとけたり。**
にわかに霊動的地震が起こった。何ということだろう。これは体見しなければ、体観しなければ、体で見なければ、見えない、分からない。驚きのそういう世界です。
27 **獄守(ひとやもり)、目さめ獄(ひとや)の戸の開けたるを見て、囚人(めしうど)にげ去れりと思い、刀を抜きて自殺せんとしたるに、**
28 **パウロ大声に呼ばわりて言う『みずから害(そこな)うな、我ら皆ここに在り』**
牢屋守は非常に責任観念が強かったとみえて、刀を抜いて自殺せんとした。なかなか、見上げたもんですよ、自殺しようとした。パウロは大声で、何も逃げやしないよと。お前たちがどんなに私たちを苦しめようが。ペテロの場合も、鎖が解け閂(かんぬき)が抜けてしまった。
29 **獄守(ひとやもり)、燈火(ともしび)を求め、駆け入りて戦(おのの)きつつパウロとシラスとの前に平伏し、**
30 **之を連れ出して言う『君等(きみたち)よ、われ救われん為に何をなすべきか』**
31 **二人は言う『主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救われん』**
獄守はパウロの前に平伏してしまった。本当に愕然(がくぜん)としてしまったわけだ。もう、どうにもならん、参ったと。
「君達よ、われ救われん為にどうしたらいいですか」
「主イエスを信ぜよ。私たちじゃないよ、主イエスはかくの如き方である」
と。パウロのキリストはこのようなキリストだ。
「私のキリストはこのようなキリストだ」
と。「信ずる」という言葉は、今のクリスチャンは、いかにおそまつに、いかに観念化しているか。このパウロの信仰の前に、本当に懺悔しなければいかん。パウロに於て「キリスト」という時は、本当にいつわりじゃなかった。普通のキリスト教会のキリストは、いつわり

で呼ばれている。平伏して呼ばれていない。

「然らば汝も汝の家族も救われん」と。彼らは聖霊のバプテスマを受けて、

32 **斯て神の言を獄守とその家に居る凡ての人々とに語れり。33 この夜、即時に獄守かれらを引取りて、その打傷を洗い、遂に己も己に属する者もみな直ちにバプテスマを受け、34 かつ二人を自宅に伴いて食事をそなえ、全家とともに神を信じて喜べり。**

「ああこの神さまは、本当に活ける神さまは私たちを活かしてくださった」と。自分たちが活かされなければ、「活ける神」なんて言えるようなもんじゃない。そういう事態がそこで生じました。これは、ピリピ伝道のところの事態です。あわせてピリピ書をお読みになるといいです。

●テサロニケ伝道

その次にはテサロニケが来る。17章です。

1 **斯てアムピポリス及びアポロニヤを経てテサロニケに到る。此処にユダヤ人の会堂ありたれば、2 パウロは例のごとく彼らの中に入り、三つの安息日にわたり、聖書に基きて論じ、かつ解き明かして、3 キリストの必ず苦難をうけ、死人の中より甦えるべきことを述べ『わが汝らに伝うる此のイエスはキリストなり』と証せり。4 その中のある人々および敬虔なる数多のギリシヤ人、また多くの重立ちたる女も信じてパウロとシラスとに従えり。5 ここにユダヤ人ら嫉を起こして市の無頼者をかたらい、群衆を集めて町を騒がし、又ふたりを集民の前に曳き出さんとしてヤソンの家を囲みしが、6 見出さざれば、ヤソンと数人の兄弟とを町司たちの前に曳ききたり呼ばわりて言う『天下を顛覆したる彼の者ども此処にまで来れるを、7 ヤソン迎え入れたり。この曹輩は皆カイザルの詔勅にそむき他にイエスと云う王ありと言う』8 之をききて群衆と町司たちと心を騒がし、9 保証を取りてヤソンと他の人々とを釈せり。**

「王」と言ったって違うよ。霊界の王さまだよ。間違えた。「天下を顛覆したる彼の者ども」と、不思議なことが原文にもその通り書いてある。私は「天下を覆すもの」と題したのはこの節によった。パウロの中には今まで無かったところのことが、事態が起きた。キリストと共に、今までなかったところの新しい事態が起き、また、新しい時代が来た。事態、また、時代が来たんだ。正に「来たるべきもの」「ホ・エルコメノス」という字ですが、この

「来たるべきもの」

が本当に来たんです。そして、その来たるべきものが何をもたらしたかというと、この聖霊である。

●霊子

現代は原子核の素粒子というものが、「原子」というのが、非常に問題になっている世界です。とにかく原子だ。今はほとんど原子の世界だ。一切の文明の動力の一番凄いのは原子である。ところが、私たちは、聖書はこの原子よりも素晴らしい聖霊です。私はこれを、「霊子（れいし）」

という。この霊子というのが本当に「来たるべきもの」であり、聖霊なんです。

ヤカンの湯が煮えたつ時、時々、「ガラガラッ」という音がする。あの「ガラガラッ」というのは、宇宙線があの時に作用するんだそうだね。宇宙線が作用して、お湯が煮えたつ時に、ああいう現象を起こすそうです。私たちも本当に福音に対して激しく求めていく。

「求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見いださん。門を叩け、さらば開かれん」

という。パウロも熱心で、一生懸命でやった。けれども、己の熱心そのものが別にいいわけじゃない。熱心であることは大事であるけれども、全存在を以てぶつかっていくことが大事なんです。頭だけじゃダメだよ。全存在でぶつかっていくことが大事です。そしたらば、そこに、ガラガラッと煮えたつようなぐあいに、パウロももの凄く熱していた。熱して、キリストを信ずる者を迫害していたが、

「なんぞ我を迫害するか！」

と、キリストに霊撃された。それで、パウロはひっくり返された。パウロは、ガラガラッと崩れちゃった。煮えたったんじゃない。ガラガラッと崩れて、今度は本当の煮え立ちに来ちゃった。それは、パウロの中に、この「キリストの霊子」が充満してきたから。この霊子を体観したんだ、体見したんだよな。この霊子を、彼は本当に、霊子の事態を体見したわけですね。霊子の本体はキリストである。これを体見したわけです。この「天下を覆すもの」は、我々が覆すんじゃない。覆すものは、この霊子が覆す。この霊子は、原子力の原子よりももっとすごい。

パウロが、霊子が発しているような眼でもって見ると、そして叫べば――これは実際に聖霊の実力が来るから――その中の悪霊が追い出されてしまう。はね出されてしまう。パウロの霊子が、悪霊をはね出してしまう。まぁ物理的現象に例えて言えばですよ。

「それでは聖霊の霊子とはどんなものだかひとつ調べてみよう」

なんてダメですよ。そういうようなわけで、あなた方の中に、本当に霊子が宿る。

●霊子こそ天下を覆すもの

お前たちが言う通り、異端の首（かしら）だよと。「異端の首」というけれども、しかしながら、本当は異端でも何でもない。これが、本当の「正統」なんです。もういつもそうです。いわゆる「正統派」が、反って脱落する。

「聖国の子らは嘆きはがみすることあらん」

と、キリストが既に言っておられる。いわゆる

「私たちは正統派だ」

と思っているご連中は、

「アブラハムの子である」

なんて言って血筋なんか誇っている者は、ダメだと。神さまの本当のアブラハムの子は、どこからでも引っ張りだして、その子にする。絶対に、人間的な伝統でも何でもない。各人が絶対に、非連続の連続を継承していくものである。親が素晴らしい伝道者だから、子が同じようになるかというと、どっこいそうはいかん。親がしょうがない者だが、どっこい、子供から素晴らしい者が出てくる。これはもう、みんな神さまが直結している。

「すべての時代は神に直結する」

とは、各人が神に直結した存在である。キリストを通して、各人が、神に直結して、この霊子を受けとったら、この霊子が天下を覆すもの。たった二人の者が――あなた方がこの霊子を受けとるところの人をつくってごらんなさい、あなた方の中から発するところのこの霊子をもって――そうしたら、やがてこれは天下を覆すものであったということが幾年か後に実証される。何も、大袈裟な伝道も何も要らん。大袈裟な伝道で、一網打尽に、ウワーッと信者をつくっても、それがいつ消えるかわからん。我々はじりじりと、本もののクリスチャンを本当に築きあげてゆく。

いつか小諸でもって、「不動心」というお話をいたしましたが、本当に動かざるところの心を、揺るがざるところの魂を――どんなに揺れ動こうとも、達磨さんの如くにちゃんと坐り直すところの――聖霊の信者というものをつくってもらいたい。確実にキリストは勝利する。しかし、それが無いところには、その人たちを通して勝利するわけにいかない。仕方がなければ、キリストは、

「石ころからでもアブラハムの子を起こす」

という。どうか、私たちは、しかし、その使命と誇りと権威とをいただいて、また栄光をいただいているところの存在として、この霊子をいただいて――我らの中のこの霊子こそが天下を覆すものである――それはうれしいなというわけで、進んでいってください。

●アテネ伝道

今度は、アテネにやって来た。

16 パウロ、アテネにて彼らを待ちおる間(ほど)に、町に偶像(ぐうぞう)の満ちたるを見て、その心に憤慨(いきどおり)を懐(いだ)く。17 されば会堂にてはユダヤ人および敬虔なる人々と論じ、市場にては日々逢うところの者と論じたり。18 斯てエピクロス派、並びにストア派の哲学者数人これと論じあい、或者らは言う『この囀(さえず)る者なにを

言わんとするか』或者らは言う『かれは異なる神々を伝うる者の如し』是はパウロがイエスと復活とを宣べたる故なり。19**遂にパウロをアレオパゴスに連れ往きて言う『なんじが語るこの新しき教の如何なるものなるを、我らの知り得べきか。**20**なんじ異なる事を我らの耳に入るるが故に、我らその何事たるを知らんと思うなり』**

ギリシヤのアテネの町にはたくさん偶像が、神々があるわけだ。コリントもそうですが。パウロは、しかし、キリストとその復活とを宣べ伝えた。復活のキリストのことをどこまでも言っている。

「復活のキリスト」

とは、キリストが復活したという、ただ奇跡を言っているわけじゃないですよ。

「復活のキリストが、かくも我々を活かし、かくも喜びを与えているのだ」

ということですよ、もちろん。どうか、聖書を読むときに、その奥を読んでくださいよ、聖霊をもって、とらわれないで。

「**儀文は殺し、霊は活かす**」

という。ところが、

21アテネ人も、彼処に住む旅人も、皆ただ新しき事を或（あるい）は語り、あるいは聞きてのみ日を送りいたり。22**パウロ、アレオパゴスの中に立ちて言う、**

いわゆるアレオパゴスの有名な演説であります。

『アテネ人よ、我すべての事に就きて汝らが神々を敬う心の篤（あつ）きを見る。23**われ汝らが拝むものを見つつ道を過ぐるほどに「知らざる神に」と記したる一つの祭壇を見出したり。然ば我なんじらが知らずして拝む所のものを汝らに示さん。**

「知られざる神に」とは、本来は、「知らざる神々に」という言葉なんですが。パウロはわざと単数に使ったらしい。あるいは、

「ここの所はどうもパウロが言ったんじゃなかろう」

なんて、シュヴァイツァーなんかもそんなことを言ってますが。学問的にどこまでが本当だか本当でないか、そんなことはどうでもいいです。

「知られざる神々に」と記した一つの祭壇を見た。けれども、私たちは、本当は全世界を造った神さまをお前たちに伝えると。

●神の中に生き動きまた在る

24世界とその中のあらゆる物とを造り給いし神は、天地の主に在（ましま）せば、手にて造れる宮に住み給わず。25**みずから凡ての人に生命と息と万（よろず）の物とを与え給えば、物に乏しき所あるが如く、人の手にて事（つか）うることを要し給わず。**26**一**

人よりして諸種の国人を造りいだし、之を地の全面に住ましめ、時期の限りと住居の界とを定め給えり。27これ人をして神を尋ねしめ、あるいは探りて見出す事あらしめん為なり。されど神は我等おのおのを離れ給うこと遠からず、28我らは神の中に生き、動きまた在るなり。汝らの詩人の中の或者どもも「我らは又その裔なり」と云える如し。

「我らは神の中に生き、動きまた在るなり」

と、これは、有名な言葉です。これは、ロマ書11章36節、コリント前書8章6節、コロサイ書1章16、17節、コリント前書15章28節あたりを、ごらんになりますというと、それと同じ角度の言葉が表れている。

パウロが、「神の中に」と言う時には絶対に、パウロにとっては、もはやキリストを抜きにして、ただ「神の中に」と言っているんじゃない。もともと、パウロはいわゆる神学者じゃないから、一々そんなことをことわりません。けれども、パウロの意識の中には、「神」と言うときには、「キリスト」を抜いて「神」という言葉は、彼には意味をなさない。

「この神はキリストにおいて現れた。その他に、自分に本当に迫って来た神さまにはならん」

と。その前にもちろん、キリストにひっくり返される前には、「神」ということがあったんです。神を直接的にして神というのがあった、神・律法というのがね。だからもちろん、それは背後にはありますよ。ありますけれども、彼の意識には、直々に「神」と言って、「キリスト」が忘れられているような言い方をしているところもあるけれども、決してそれはキリストと離しては、パウロにとっては意味をなさない神であった。もはや、救われたパウロにとっては、意味をなさない神であった。

私たちが、ある時には、「神さま」あるいは「お父さま」といって祈る。ある時は、「主さま」といって祈る。どちらに祈りかけても、これは、二にして一つである。なんとなれば、我々の祈りは、聖霊によって祈っているから。聖霊に於ては、もはや分裂がない。聖霊が、神とキリストに於て貫かれているところの、三位一体でありますので。「お父さま」と呼んでも、もうそこには「キリスト」がそこに現前しておられる。「主さま」と呼んでも、その背後には「お父さま」が現前しておられる。そういうわけで、どうか皆さんが、祈りのときに、そういった妙なゴタゴタを感じないで、どちらを呼ぼうが、それは一つであると。離れたものでは絶対ないという渾然たる意識を、パウロと同じ意識を持たなくてはいかんわけです。

それで、

「我らはこの神の中に生きる、また、動きまた在る」

と。この聖霊です。本当に「神の中に」という時にはもはや、それは、

「聖霊の中に、キリストの中に」

ということです。その中に生き動き在るのであると。それでなければ、パウロの伝道の現

実がかくの如き、生命に満ちた、栄光に満ちた、力に満ちたものでは、絶対にあり得ないわけです。ところが、金や銀や石などでもって刻んだものを拝んだりして何になるかと。

29かく神の裔なれば、神を銀・金・石など人の工（わざ）と思考（かんがえ）とにて刻める物と等しく思うべきにあらず。30神はかかる無知の時代を見過ごしに為（し）給いしが、今は何処にても凡ての人に悔改むべきことを告げたもう。31さきに立て給いし一人によりて義をもて世界を審かんために日をさだめ、彼を死人の中より甦えらせて保証を万人に与え給えり』

人間の造ったものは、どんなに素晴らしかろうが、ダメだと。人間の素晴らしさなんて問題じゃないと。キリストに於て活ける神が、私たちを、またキリストに於て活ける人としてくださった。

「活きる活きる、甦る甦る」

と、どの書翰にもパウロがくどいほどに言っている。どれほど、甦りのキリストに彼が驚嘆し、それに喜んで、この生命でもって活かされていたかという事が分かるわけです。

「もし、キリストが甦らなかったら、我らの信仰は空しい」

と。空しいということはキリストという人の甦りそのものを遠くに置いて言っているのではない。私たちは生命がないから、何事でもないということになってしまうということです。

●コリント伝道

それから、今度は、コリント伝道に入ります。もう、いい加減で止めようかと、パウロは思ったんだけれども、とうとう、テテオ・ユストという人の家に迎えられまして、そして、一年半、ここに留まることになった。

アテネから、コリントだけでも、大変な距離ですけれども、これが当時いろんな艱難にでっくわしながら、地の極までも行こうとしたこのパウロの盛んなる原始力というものは、なんとまあ素晴らしいかと思う。18章です。

9主は夜まぼろしの中にパウロに言い給う『おそるな、語れ、黙すな、10我なんじと偕にあり、誰をも汝を攻めて害（そこな）う者なからん。此の町には多くの我が民あり』

この町には多くのわが民があるから、一生懸命で福音を伝えろと。そして、コリント伝道を最後にして、またぐるっと回りますけれども。ずうっと帰ってくるわけです。パウロが伝道してゆく、このすさまじい勢いというもの、いたるところに於て聖霊の身証（あかし）をしてゆく彼。復活のキリストが彼と共に旅をしておられる。

私たちは――パウロも弱き人であります――私たちの中に聖霊のキリストは聖霊として宿り給う。しかしながら、聖霊として宿り給うということを、ただ手離しにしたって、それはおかしなことである。我々がキリストを深く、聖霊を宿すというところには、どこま

でも対象として、はっきり「主さま」という、「主」ということが自覚される。

復活のキリスト、この復活のキリストが、パウロと一緒に歩いていた。エマオ途上に於て、復活のキリストがあの旅人と共に歩いて行ったように。この主が、「ホ・キュリオス」が、主がパウロと共に歩いていた。独り往けど、寂しくない。主が共にいたもう。

「懼るな。我なんじと共にあり、我みたまをもって汝の中にあり」

と、時々このように主が語りかけてくださる。

「共に在り、中に在り」

と言って、主がパウロと共にある。パウロの一番そういった人間パウロの自覚において、彼の力となって、慰めとなっているのは、この主であります。「主」という、「キュリオス」という、この主です。自分はこの「主の僕」であると。

「主よ！あなたは誰ですか」

と、ダマスコ途上でひっくり返された時に、最初に叫んだ言葉です。もう誰より、とにかくパウロにとっては、慕わしいのです。これはもう、彼の親なんです。だから、彼はキリストとは親子の関係と言ってもいい。また、本当に主僕の関係。

「我はキリストの僕である」

と。昨日も申し上げたとおり、喜んで僕であると。服従としての僕じゃない。

●絶対の自由

「スパルタクス」という奴隷がいた。これは歴史上の人物で、紀元前70年頃。これがローマの奴隷でね、まぁ、ひどいもんだよ、ローマ人てのは、いばっていてね。これは映画で見たんだけれども。私はこの頃見た映画では一番うたれたね、あれは。ある意味では、「ベンハー」よりも、私はうたれた面がある。奴隷がいかに、奴隷から解放されて自由を求めているか。自由を求めてのスパルタクスのあの姿。とうとう、それは、リンカーンに於て、あの南北戦争に於て、奴隷解放ということをリンカーンがやった。そのリンカーンは暗殺されたけれどもね。

人間は捕らわれの者です。何に捕らわれているかというと、一番これが仕方がない捕らわれ。だから、ガタガタガタガタと、世界の人類の歴史は、ゴチャゴチャで混沌で、最後はいつも戦争、戦争と、続いて来たわけだ。いろんな悪いことは、全部、この奴隷、何かに捕らわれているところの、その心から来ている。そして、皆は自由を求めている。しかし、その自由は、皆、人間本位の、自己本位の自由である。決して、本当に自由じゃない。

この一番根本的な捕らわれから解放してくださったのがこのキリストです。本当に自分を解放してくださった、空の鳥よりも自由な魂にしてくださった、存在にしてくださったこの自由。このキリストを本当に――あなたは「先生」でも何でもない――ただ「主」という言葉だけが表せるところの関係であります。

彼は僕となって、本当に自分が、マルチン・ルターが言った奴隷意志となって――キリスト自身が奴隷意志となった――喜んで喜んでいる。だから、絶対矛盾の同一なので、この僕、この奴隷こそが、実は本当の自由であると。ルターの『クリスチャンの自由』の有名な文章は、ルターがこのパウロの自由をうたっているわけだ。そこにおいて近世の自由の世界が開かれていく。ところが、キリストに於ける神の自由、キリストにおける自由が、今度はまた私されてしまって、またこの自由から遠ざかってしまった。もう一遍、本当にこのキリストの僕となるということ、これが絶対の自由なんです。これこそが絶対の自由なんです。今言っている自由なんて、決して自由じゃない。この自由は、キリストの僕となると同時に、また万人の僕となって、奉仕するところの姿になっていく。これは自由な奉仕なんです。愛の奉仕です。荷ないあげの奉仕です。相手を救いあげていく奉仕なんです。相手を救い上げていくところの、そういった僕、婢となる。

パウロは、キリストを本当に主として、自分を本当に僕として、喜んで伝道にいそしんで、命ぜられるままに、幻の示すままに、キリストが「行け」という所に行き、「止まれ」というところに止まり、「塵を払え」という時には払い、「サタンを追い出せ」と言う時には追い出し、「病を癒せ」という時には癒し、すべての仕えるところに仕えた。それは自由自在である。彼は本当に僕として、自己中心でなくて、神中心の本当に救いをもたらすところの、聖名の上の自由というものを持っている。

そのはたらきを為すところのものは、さっきから申し上げている霊子である。

「天下を覆す」

という。天下を覆して、本当に新天新地をもたらすところの、この原始力が彼の中に、この霊子力が、霊気が本当の自由の力を持っている。自由というのは、この霊子が持っていた本当の姿であったと。

私たちは、そのキリストと共に、もうどんなことがあっても――

「こういう場合にはどうだろうか」

なんてのは、そういう信仰だったら、力はありませんよ――どういう場合であろうが、何がこようが、どんなに運命環境がどうなっていこうが、絶対だというところが、これがキリストの世界です。これは聖霊が内住して、聖霊に貫かれて、抜けちゃわなければ。そういった、抜けたクリスチャンになるまでは、それがしょうがない。人がどんなに賞賛したってダメ。また、人がどんなにけなしたって、大丈夫だと、こういう世界です。どうか、皆さんは、そういうクリスチャンとして、もう問題はない。そういうわけでもって進んで行きましょう。おしまい。